



「やったあ！勝ったよ！」

運動会シーズン真っ只中の6月。町内各地で、それぞれ工夫を凝らした運動会が開催されました。写真は19日に行われた弟子屈小学校大運動会での1コマ。あいにくの雨混じりでも、子どもたちは元気いっぱい！綱引きで勝利を手にしたチームが、歓喜の雄たけびを上げました。

Public relations magazine

2016.7

No.743

てしかが

主な内容

- 「少年の主張」弟子屈大会……………②
- 平成27年度弟子屈町財政の状況……………④
- 協力隊通信……………⑦
- 姉妹都市・日置市物産展を開催！……………⑧
- 第24回参議院議員通常選挙……………⑩
- 町税などの納期限／夜間納税窓口開設……………⑪

てしかが歴史写真館 183



川湯温泉街の足湯近くに建つ碑

K温泉のサビタが咲くころ

今からちょうど60年前。無名の新人作家が世に送り出した小説が、70万部を超えるベストセラーとなりました。作家の名は原田康子。本の題名は「挽歌」。元々はガリ版刷りで、わら半紙をとじた「北海文学」という同人誌に、10回にわたって掲載されたものです。作家も無名なら、掲載された同人誌も無名の存在。しかも活動の場が地方だったということで、この1冊の登場は“文学的事件”として多くの関心を集めたといえます。翌年には映画化され、ブームをさらに勢いづかせるものとなりました。今でこそ、撮影地巡りがその地域の観光資源となっていますが、この現象はその点でも先駆的だったといえそうです。

1992(平成4)年、川湯温泉の湯の川園地内に「挽歌」の一節を刻んだ文学碑が建てられました。

わたしはゆっくり温泉街の通りを歩きだした。日射しの強くなりかけた火山灰の通りに、硫黄の噴せるような濃い匂いがただよみ、修学旅行の少女たちが白い花片のように群れていた。

川湯温泉が「K温泉」として、作品に登場する縁で実現しました。原田康子の「挽歌」に次ぐ作品は「サビタの記憶」。ここでも、K温泉が物語の舞台となって描かれています。サビタとは、ノリウツギという植物の北海道での呼び名です。

今年も、K温泉がサビタに彩られる季節がやってきました。

てしかが郷土研究会(斎藤)